

見方も、キリスト教とプラトニズムの双方とも二世界論で地上世界を蔑視しているという通俗の見解もともに退けるべきだと断じられる。超越的世界とは「末期の眼」が視た、かけがえのない一回限りの現実の存在者に他ならないとされる。

第五章では、著者にとっての武蔵野のように、各人には「野の魂」というべき個人を超えた深層意識的「原風景」が思想・教育に先立つ元型として働き、美的感覚をも規定してしまうのではないかと問いかけられる。

以上手短に概観してきたが、本書はプラトニズムに興味を覚える一般の読者にとって、構成面でも、基本的知識習得の面でも、平易かつ高尚な文体面でも推奨しうる好著であるのはもちろんのこと、むしろ古代中世哲学の研究者に向けて、狭い専門領域の殻から外に出て「プラトニズムを生きる」ことの模範を示している点に最大の価値があると評者には思われた。

ただし、よき編集者に恵まれなかった不運を差し引いたとしても、後進の研究者に対しては、同一語についての漢字と平仮名、「編」と「篇」、「帰還」と「還帰」の混在、ギリシャ語母音の長短・綴り、アクセントの位置の不正確、氣息記号の脱落、洋書名の非イタリック、出典箇所誤記、原文引用箇所の不足、略号、引用日本人名の誤記、訳語の不統一などを避け、校正の範も垂れて頂きたかった。

---

荒井洋一著

『アウグスティヌスの探求構造』

創文社、1997年、xxii+362+23頁

樋 笠 勝 士

「探求構造」とは何であろうか。探求が単なる「探し物の搜索の経過」であるならば、結果として構築物が見えてくる場合を除いて、そこに「構造」があるとは言えないであろう。しかし、そもそも探求が無秩序なものではなく、探求のそれぞれの部分が何らかの仕方次第に探求の全体像に寄与する構成的且つ求心的な性格をもつものであるならば、そこに「探求構造」があると言ってもよいのではないだろうか。そのような観点からアウグスティヌスの探求の言葉のうちに構造的なものを探ろうとする本

書は、全体的・総合的な視線の下に、言葉の解剖への熱意に満ちた研究であると言える。

本書の各章は、もともと独立した研究成果であり、それぞれ別々に読むことが出来るが、他方で、それぞれの内容には本書全体に関わる統一的な視点があると思われる。その立場から見れば、本書全体の構成は四つの部分から成っているとしよう。それは、著者がアウグスティヌスから離れて自由に思索する序章、『告白』に基づく研究である第1章から第6章、『ソリロキア』と『ヨハネ福音書講解』に基づく研究になる第7章から第9章、本書の結論部に相当する第10章と第11章である。更に、この構成は主題の上で単なる並列的な羅列ではなく、一貫した問題意識が通底する立体的な論究の過程である。評者の見る限り、序章は本書全体の研究を全体的に方向づける思索の指導的役割をもち、また他方で第10章と第11章が、第1章から始まる『告白』というテキストの個々の解釈を最終的に全体的に捉えなおそうとするねらいをもっており、そこから、「事柄そのもの」を論ずる序章と、「アウグスティヌス」を論ずる第10章と第11章とは、本書における著者の研究の主題を互いに映しあう鏡像的な働きをなしているとしうるのである。

さて、本書全体を統一する著者の主題乃至問題意識は、いわば人間学的な事象にあるといつてよいであろう。叫ぶ、呼びかける、信じる、愛する、探求する、泣くなど、極めて人間的と言える活動、しかも個々人に属する私的な内面の活動に焦点が絞られている。勿論、アウグスティヌスにおいて考察する以上、それらは、神を前にした人間アウグスティヌスの事象である。しかし、著者は、それをアウグスティヌス自身の問題としてではなく、本来的に広く人間の普遍的な問題として再構成することを試みる。その考察は、評者の見るところ、「私とあなたとは何か（人称存在論）」と『告白』とは何か（『告白』論）」という二つの問いの入り口から入って、根本的な問題相へと収斂する方向で論じられている。この二つの問いに沿って見ることにしよう。（以上の見通しについては、「創文」395号に掲載された著者自身による小論「外なる呼びかけと内なる呼びかけとに就いて」も参考にしたので、それを参照されたい。）

(1) 「人称存在論」については、序章において、先ず「私とは何か（自己認識）」と「あなたとは何か（他者認識）」という二つの認識の並行性と相互性として示されている。並行性とは両者の認識がその深まりに応じて比例関係にあることであり、相互性とは、自らの深い他者認識が常に相手による深い他者認識と対応しながら、その深

さの質において相互的と言える関係をつくっていることである。これに基づいて、著者は「知人島のイメージ (21頁以降)」を用いて、心の中に、知人 (島の周辺部)・友人 (内陸部)・親友 (中心部にして山) という配置図を描き、人がその都度の「出会い」によって自己のうちで周辺部から中心部へ (親しくなる)、中心部から周辺部へ (遠ざかる) と他者を配置するという想定をするが、そこで重要なのは、「初めに『私』と『あなた』が存在し、ついで『私』と『あなた』との相互関係が生じてくる、というよりも、初めに相互関係性が生じ、ついでその相互関係性によって深く触発され、揺り動かされた結果、『私』と『あなた』との存在が生じてくる、と言わねばならない (26頁)」とする点である。ここには atomism による個の成立ではなく「関係性」による個の成立という極めて現代思想的な視点があると言えよう。また更に、西田幾多郎等を援用しながら、「親友の山」を中心とする知人島は実は「上の方へと向かっていく運動体 (30頁)」であるとす。即ち「山」は、山の上方の「あまりにもはるかなもの」を目指して形をつくる運動を続けており、この「山の運動」は、今のところ「鏡におぼろに映ったものを見る (1 コリ 13-12)」という仕方、「私」と「あなた」という関係の深みにおいてのみ互いの心のうちに見いだされてくるのである。

さて、以上のような描写は「知人島」のイメージに基づく人間の原風景の素描に留まるものであるが、それが、続く第1章から具体的なテキスト解釈を通じて肉付けされてくるのである。『告白』冒頭の解釈を通じた、知に対する信の先行性を研究の出発点にして (67頁など)、続いて「私」と「あなた」の間の距離の問題として場所的表現が吟味される。そこにおいて人間の被造性としての〈ad te〉が確認される (150頁)。第4章では「この光の『あなた』への道の途上においてのみ『真の友情』は存在するのである (169頁)」と主張され、第7章では、「私」と「あなた」の「住む者」「住まわれる者」という相互性が強調される。特に重要なのは、第8章の『ソリロキア』を通じて示される「真の意味での『私』 (286頁以降)」の概念である。それは「真の友情」が成り立つときの「私」であり、そのような「私」は友人から見れば「(上方へ動く) 親友の山」に当たるような「私」であろう。著者によれば、このような場面で、「友人を信じる」における「信」とは「善 (bonum)」に根差すものなのであり、そのゆえに第9章において「私たちを越えたものが私たちを、本当の意味で結びつけてくれる (310頁)」としうるのである。このような論究の流れを序章と結び

つけて理解するとき、「あなた」が神でもあり友人でもある『告白』の人称性からすれば、そこに『キリスト教の教え』における愛の律法たる、神への愛と隣人愛を見いださないわけにはいかないであろう。「人称存在論」とはその地点に立つものであると思われる。

そもそも「人称存在論」は「論」としては途上存在である。或いは『告白』冒頭の解釈の現場から紡ぎだされた「提案」的性格が強いと言った方がよいかもかもしれない。しかし、著者は、解釈上の措置として案出された文法上の「人称」という当初の視点に対して、一人称と二人称の特権的性格やその「出会い」の根源性という考え方から、更に人間性としての「人格」という視点を加えて、そこにおいて、淵と淵とを結合する根拠の存在を関係づける方向で考察することで、まさに「人称存在論」としての「論」の可能性の基盤を固めていくのである。

(2) 『告白』とは何かの問題については、第1章と第10章とが重要な位置を占めるとされる。「人間の最後の言葉は呼びかけであるのと同じように (68頁・334頁)」。ここで、「呼びかけ (invocare)」とは信の系列に属するものである。著者は、知に対する信の先行性を『告白』冒頭の第6連に対する新たな解釈の可能性として提示しつつ (65頁以降)、それに依拠して、『告白』全体の「初め」に、「信」が先行的に位置づけられていると主張する。この「信」は、知の範囲を超える超越・冒険の活動であって、その意味で、第11章の問題である「叫び」と同次元的である。「叫び」は「その声が真に神へと向かっているとき (354頁)」自ずから「呼びかけ」へと転じてゆく。ここでも、人称存在論的な相互性が、神の叫びと人間の叫びの双方向性において指摘され、そして「心の奥底からの苦しみの叫び声の方向と讃美の声の方向とは軌を一にしている (356頁)」とされる。その方向を表す言葉は、著者が一貫して注目している〈ad te〉であり、これは『告白』末尾にも登場する。このようにして、『告白』というテキストについては、その最初と最後が同一の「呼びかけ」をもつことから、『告白』の全巻は「最初の呼びかけと最後の呼びかけとの間の長い挿入 (68頁)」と解釈されることになる。この考え方から何が見えてくるだろうか。評者の見る限りではあるが、そこから『告白』は言わば人間である」という風景が見えてくるのではないだろうか。人間の最初と最後が同じ「呼びかけ」をもつ以上、『告白』もまた人間的存在として見えてくるのである。そうであるとすれば、『告白』は生きものであり、その固有の統一性を有している。勿論、この統一性は、決して主題上の統一性と

いったものではなく、あくまで生命的・有機的統一性なのである。「生きもの」である以上、『告白』には、どこかに向かうという行程や成長発展が、そして全体としての有機的調和や生き生きとした活動があることになろう。そのような生きものには「生きる目的や夢、理想や願い (286頁)」があるだろうし、そうであるならば、その生きものは深い他者認識の相手としての「あなた」になり、また「親友の山」となるであろう。このような見方は、まさに「読む人 (lector)」と「書かれたもの」の間の人称存在論的な「関係」の問題であり、この点で、本書は、『告白』論としても、テキスト論としても新鮮な見地を有していると思われる。

人称存在論的立場から『告白』を読み解く本書は、それ自体極めて生き生きした探求の書である。このような、正面から人間の根源的事実そのものに立ち向かい着実且つ全体的に思索してゆく姿勢は、その根源性へのアプローチの故に『告白』研究に新しい道を開くと評者には思われる。実際、そこから、『告白』というテキストが書かれた事実に対する積極的な理解が現れてくるのである。つまり、本書によれば、『告白』の主人公アウグスティヌス自身の体験した言葉は、肯定的なものであれ否定的なものであれ、彼自身に解釈経験をもたらし、その都度心の中の島に他者認識の配置図を作らせていった。そのような、現実を経験する者の立場とは別に、自己を反省的に書き記す立場にもいるアウグスティヌスは、今度は他者への伝達（「人類に語る (347-8頁)」）のために、そして「深い淵からあなたに叫ばねばならない (347頁)」ことを理解するために、『告白』を、あなたへの「呼びかけの書・〈ad te〉の書・淵と淵を繋ぐ書」として書き表したのである。

---

岡野昌雄著

『アウグスティヌス『告白』の哲学』

創文社、1997年、xvi+230頁

菊地伸二

本書はアウグスティヌス研究に長いこと取り組んでこられた著者が京都大学に提出した学術論文に修正を加えたものであり、『告白』全体を貫いている主題を作品その